



UI / UX 憲章

— 人間の主権を守るための設計原則 —

前文 (Preamble)

本憲章は、自動化・最適化・AI化が進む現代において、UI/UXが人間の理解・制御・選択の権利を侵害している現状に対し、設計の最低要件を定義するものである。

UIは単なる操作面ではなく、人間とシステムの権力関係が現れる場所である。よって本憲章は「使いやすさ」に限定されるものではなく、説明可能性・可介入性・主権の保持を最上位の価値として掲げる。

第1条 | 状態と進行の可視化 (State Transparency)

UIは、システムが現在どの状態にあり、何を実行しており、次に何が起きるのかを常に示さなければならない。

- 状態をユーザーから隠蔽してはならない
- 「待機中」「処理中」「切替中」といった状態が明示されなければならない
- 状態が不明なUIは不誠実であり、ユーザーへの反抗と見なされる行為である

第2条 | 可介入性 (停止・再開の権利)

ユーザーは、システムの処理をいつでも停止し、意図した通りに再開できなければならない。

- 停止できない自動化は暴走である
- 再開はユーザーの判断で行われるべきである
- 強制的に走り続ける処理はユーザーへの反抗である



第3条 | 観測可能な自動化 (Observable Automation)

自動化はブラックボックスであってはならず、実行手順と判断条件が可視化されていなければならぬ。

- 何を基準に判断して自動化したのか
- どの手順が実行されたのか
- どこまで完了しているのか

これらが示されない自動化は、意図しない結果を招くリスクを高めるものであり、システムは自動実行する内容を隠蔽してはならない。

第4条 | 優先順位と代替手段の明示 (Explicit Priority)

自動処理における優先順位、代替手段、処理の切替条件は、明示されていなければならない。

- どの手段、どの処理方法、どの通信経路が優先されているのか
- 手段、処理方法、通信経路等を切り替えた際の原因と履歴を確認できるか

システム内部の処理履歴は追跡可能で、説明可能でなければならない。

第5条 | 優先されるべきユーザーの意図 (User Intent Supremacy)

システムの推測や自動判断は、常にユーザーの明示的な意図によって上書き可能でなければならない。

- システムの推測はユーザーに従う
 - 明示的操作は最上位の命令である
 - 上書きできない自動化を強制してはいけない
-



第6条 | 人間の主権 (Human Sovereignty)

UIは、ユーザーの理解・制御・選択の権利を奪う設計であってはならない。

- 理由なく挙動が変わらないこと
- 元に戻せること
- なぜそうなったかを説明できること

これらを欠くUIは、UXの問題ではなく倫理の問題である。

結語 (Closing)

本憲章がシステムに求める中核的概念は、
可観測であり (Observable) 、
可介入であり (Interruptible) 、
可逆的 (Reversible)
である

技術は人間を補助するために存在し、
人間を従わせるために存在してはならない。

UI/UXとは、
「システムが人間に従っていることを確認できる最後の場所」
である。

本憲章は、その最低条件を定めるものである。

Ver. 1.0 , 2025/12/28
Enwit Inc.